

**田原本町埋蔵文化財
調査年報**

2001年度

11



2002

田原本町教育委員会

正 誤 表

		誤	正
P 19	所在地	小字坊ノ北浦	小字八反切田
P 22	遺物量	10箱	5箱
P 22	出土遺物 の 3行目	白磁四耳壺片	白磁四耳壺片
P 26	位置・環境 の 6行目	・・初めてある	・・初めて <u>である</u>
P 26	出土遺物 の 2行目	左籠印塔	宝蓋印塔

例　　言

1. 本年報は、田原本町教育委員会が2001年度（平成13年度）に実施した発掘調査及び試掘調査、工事立会の略報である。発掘調査については、別途、その概要報告書を作成中である。
2. 発掘調査は、表2にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。
3. 本文に記された遺構の記号については、S Dが溝、S Kが土坑または井戸、S Rが河跡、S Tが墳墓等を表す。
4. 遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した出土時の箱数である。
5. 本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』(木耳社)による。
6. 調査・遺物整理にあたっては、徐 賢珠、安部みき子、石野博信、今津節生、小栗明彦、金闇 悅、金原正明、河上邦彦、木村史明、佐原 真、寺澤 薫、外山秀一、中島経夫、樋口隆康、森 浩一、和田 英諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。
7. 本文の執筆は、各調査担当者である清水琢磨、豆谷和之、藤田三郎が執筆し、編集は藤田がおこなった。

目 次

I. 2001年度の調査概要	1
II. 発掘調査の概要	
(1) 唐古・鍵遺跡 第84次調査	5
Column 1 陶質土器が出土した方墳	6
(2) 唐古・鍵遺跡 第85次調査	7
Column 2 環濠出土の昆虫からみた古環境	8
Column 3 近世の瓦賀井戸鉢と亀	9
(3) 唐古・鍵遺跡 第86次調査	10
Column 4 繩文の祭祀遺物と伊勢湾岸地域の壺	11
(4) 阪手東遺跡 第2次調査	12
Column 5 低地部で見つかった大規模な方形周溝墓群	13
(5) 阪手北遺跡 第3次調査	14
Column 6 阪手北遺跡から出土した古代の遺物	15
(6) 羽子田遺跡 第21次調査	16
(7) 羽子田遺跡 第23次調査	17
(8) 羽子田遺跡 第24次調査	18
(9) 保津・宮古遺跡 第28次調査	19
(10) 保津・宮古遺跡 第29次調査	20
Column 7 5世紀中頃の陶質土器	21
(11) 法貴寺遺跡 第3次調査	22
Column 8 中世居館の出入口	23
(12) 法貴寺斎宮前遺跡 第4次調査	24
(13) 常宝寺遺跡 第1次調査	25
(14) 薬王寺推定地 第1次調査	26
Column 9 薬王寺を推定する	27
(15) 多遺跡 第20次調査	28
III. 試掘調査・工事立会の概要	29
(1) 筋違道の試掘調査	30
(1) 法貴寺遺跡の立会	32
(2) 藏堂遺跡の立会	33
(3) 味間西遺跡の立会	34
(4) 平野氏陣屋跡の立会	35
(5) 矢部遺跡の立会	35

I. 2001年度の調査概要

本町が実施した2001年度（平成13年度）の発掘調査は、15件である。昨年度が12件であり、現在のところ横ばい状況である。また、発掘届出件数も例年とあまり変わらない状況であり景気低迷による開発事業の減少は都市部周辺でも同様な状況といえよう。

さて、本年度15件の調査の内訳は、公共事業に伴うもの6件、民間開発に伴うもの4件（うち重要遺跡認定に基づく調査1件）、個人住宅等建築に伴う調査4件、唐古・鍵遺跡の範囲確認調査1件である。これらの調査の大半は、期間的には1～2週間程度、面積では数十m²から300m²の小規模なものである。いずれも期間・面積とともに圧縮された状況での厳しい調査である。このような中にあって、本町では数少ない大規模な開発の調査として、弥生時代の方形周溝墓を検出した阪手東遺跡の調査がある。この遺跡は、遺物が少なく遺構を確認しにくい状況にあり、小規模な面積の調査ではこれらの遺構は到底確認できなかつたのではなかろうかという危惧がある。低地部における遺跡・遺構の確認について改めて考えさせられるものであった。

本年度の成果は、弥生時代から近世まであり、時代別に述べる。

弥生時代 弥生時代では、唐古・鍵遺跡とその周辺遺跡の調査成果が大きい。特に、弥生集落の構造と環境、墓域に関して特筆すべき成果があった。

唐古・鍵遺跡の3件の調査は、いずれも国道24号線沿いの遺跡西半部の場所にある。第84次調査地はムラ北西部の居住区で、弥生時代中期から後期にかけての掘立柱建物の柱穴を多数検出した。一方、本地北側の第79次調査地では竪穴住居地域であることが判明しており、このことから微高地部分に掘立柱建物、それより低い部分では竪穴住居という構成単位の集落構造が存在する事が推察できるようになった。

第85次調査地は北西部の環濠帯部分の調査であった。検出した環濠は、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて再掘削されながら維持されているもの2条である。これらの環濠の植物腐植土層から昆虫遺体を多数検出し、弥生時代の古環境復元のための資料を提供した。この成果については、「コラム2」でも述べているが、唐古・鍵遺跡の共同研究のテーマでもある「唐古・鍵遺跡の古環境」の一連の成果もある。

第86次調査は、下水道の人坑の調査で小規模であったが、中期の大溝を検出した。また、本遺跡でも類例の少ない伊勢湾沿岸地域の朝日式の壺や石棒が出土するなど成果は大きい。

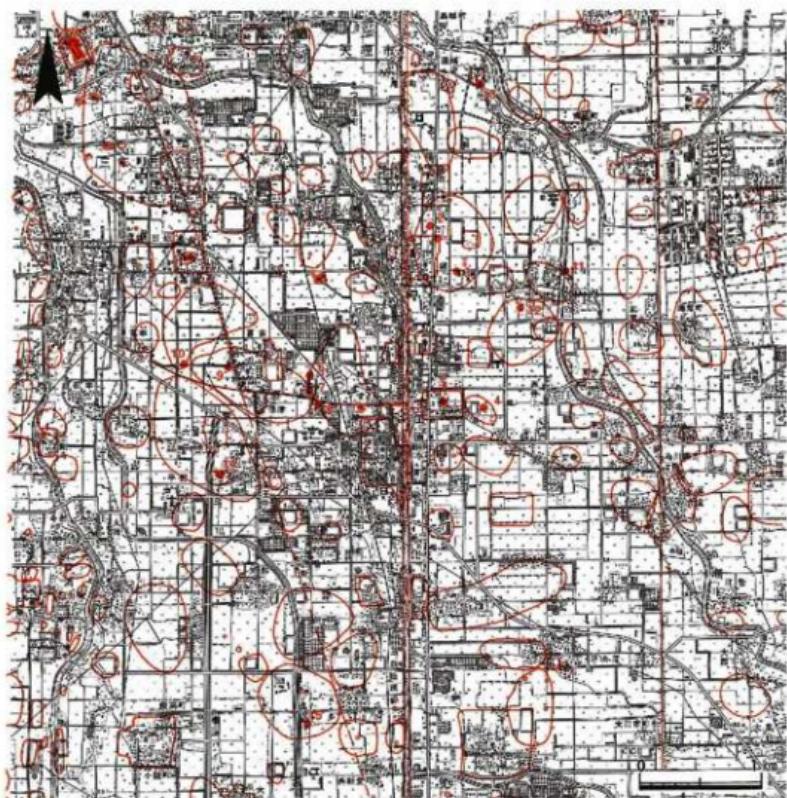
唐古・鍵遺跡周辺の遺跡調査としては、阪手東遺跡第2次調査と羽子田遺跡第23次調査がある。いずれも唐古・鍵遺跡から1kmほど離れた地点の調査で、方形周溝墓を検出した。阪手東遺跡で検出した方形周溝墓は、弥生時代中期中頃の大規模なもので、周辺に弥生遺跡の存在が希薄なことから、唐古・鍵遺跡の墓域の可能性が高い。

古墳時代 前述唐古・鍵遺跡第84次調査では、弥生集落の上に小規模な方墳が築造されていることも判明した。一辺8m前後のもので、墳丘は削平され周濠のみ残っているが、周濠内から須恵器や陶質土器が出土した。この他にも2基の方墳があり、これまでの調査成果を総合すると、唐古・鍵遺跡の西地区に方墳を主体とする古墳群が形成されていたことが判明しつつある。

保津・宮古遺跡の西端で実施した第29次調査では、保津・宮古遺跡の西限を確認するとともにその西側に5世紀後半の溝を検出し陶質土器等が出土した。本地の南側には「平塚」の小字名が存在し削平古墳あるいは集落が存在する可能性がでてきた。この調査区は、遺跡の

表1 田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

	発掘届 57条の2 (変更願合)	発掘通知 57条の3		発掘	試掘	立会	計
2001年度 (平成13年度)	29	20	通知文	17		32	49
			実施分	16(県1)	2	19	37



田原本町の遺跡と発掘調査地点

表2 2001年度 発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	調査地	原因者	原因	調査期間	調査面積	時期	調査担当	備考
1 唐古・鍵	第84次	田原本町唐古121-1	田原本町	範囲確認	2001. 5. 18 ～11. 10	424m ²	弥生・古墳・中世	豆谷和之 豊田博一	国庫補助事業
2 唐古・鍵	第85次	田原本町唐古64-1	東野泰夫	店舗建築	2001. 7. 11 ～9. 19	226m ²	弥生・近世	豆谷・豊田	国庫補助事業 (重要遺跡認定)
3 唐古・鍵	第86次	田原本町唐古171-1他 南側道路	田原本町	下水道人孔 の設置	2002. 1. 22 ～2. 8	62m ²	弥生	豆谷	下水道課
4 阪手東	第2次	田原本町阪手233-1他	田原本町	(仮称)緑合生産 センター建設	2001. 10. 18 ～02. 2. 19	4,157m ²	赤山・古墳・中世	清水輝哉 豆谷	(教部)生産学習 センター建設事業
5 阪手北	第3次	田原本町阪手198-1他	田原本町	都市計画街路 整備工事	2002. 12. 19 ～03. 3. 7	147m ²	古代・中世	藤田三郎 豆谷・豊田	都市計画課
6 羽子田	第21次	田原本町新町125	吉村 実	分譲住宅の 建設	2001. 6. 27 ～7. 24	268m ²	弥生・古墳・中世	清水	受託事業
7 羽子田	第23次	田原本町新町199-6	松田順幸	個人住宅の 建設	2001. 10. 23 ～11. 26	36m ²	弥生	豆谷	国庫補助事業
8 羽子田	第24次	田原本町保津10-12	松井敏之	個人住宅の 建設	2002. 1. 16 ～1. 25	57m ²	古墳	藤田三郎 豆谷・豊田	国庫補助事業
9 保津・宮古	第28次	田原本町宮古 136-2, -3, 137-2	石橋赤史	個人住宅の 建設	2001. 4. 5 ～4. 17	113m ²	中世・近世	清水	国庫補助事業
10 保津・宮古	第29次	田原本町宮古151-1他 北側道路	田原本町	道路整備工事	2002. 1. 10 ～2. 22	231m ²	弥生・古墳	藤田三郎 豆谷・豊田	建設課
11 法貴寺遺跡	第3次	田原本町法貴寺417-1	大阪府立考古 博物館	マンゴンの 建設	2001. 8. 20 ～11. 18	211m ²	中世	豆谷	受託事業
12 法貴寺古宮殿	第4次	田原本町法貴寺1609 他南側水路	田原本町	水路の改修	2001. 12. 3 ～12. 14	164m ²	中世・近世	豆谷	奈良振興課
13 常宝寺遺跡	第1次	田原本町八洪194-1	八田自治会	集会所の建 築	2001. 5. 28 ～6. 4	108m ²	中世	清水	国庫補助事業
14 薬王寺推定地	第1次	田原本町薬王寺478	奥 実一郎	個人住宅の 建設	2001. 7. 31 ～8. 14	60m ²	中世・近世	清水	国庫補助事業
15 多	第20次	田原本町多189-2、 190-2	㈱エヌー	機器販売新 拠点建設	2001. 9. 18 ～9. 25	50m ²	古墳・中世	清水	受託事業

範囲外であったため、宮古北遺跡が南東部に拡がるとし、遺跡範囲の変更を行った。

古代 古代の遺跡調査としては、阪手北遺跡第3次調査がある。本遺跡は、下ツ道と近年明らかになりつつある「保津・阪手道」の斜行道路の交差点近くに存在する遺跡で、墨書き土器や綠釉、石帶など官衙的な遺物が出土し、初めて遺跡の一端が明らかになった。極めて重要な遺跡と推定され、今後、古道と遺跡の関係、文献の検討など課題も多い。しかし、この遺跡の本体は、現阪手北集落と重複しており、その内容把握には時間を要する。

中世・近世 中世の調査では、法貴寺遺跡第3次調査において、居館の東側出入口と思われる位置を確認した。これは、その西側で調査された第1次調査の環濠居館の東端に当たり、今回の調査によって居館の全体像を確認できることになる。また、薬王寺推定地においては、初めての調査であったが、凝灰岩製の宝鏡印塔の残欠や瓦片が出土し、また、寺の南側を区画すると推定される溝を確認したことから、本地の北側に寺域が拡がっていることが想定できるようになった。さらに出土遺物から14世紀頃から存在していた可能性も示した。

唐古・鍵遺跡の第85次調査においては、16世紀の瓦質井戸枠を5段積み上げた立派な井戸を検出した。この井戸内からは、イシガメとその卵、イタチなどの骨が良好な状態で出土した。このような遺構の存在から弥生時代の唐古・鍵遺跡の北西部には、100×200mほどの16～17世紀の屋敷地がつくられていることが判明してきた。

(藤田)



唐古・鍵遺跡の航空写真と調査位置（平成13年度分）



鋼鐸形土製品



鳥形土製品



土鍵



用途不明土製品

唐古・鍵遺跡第84次調査出土各種土製品

II. 発掘調査の概要

(1) 唐古・鍵遺跡 第84次調査

所在地 田原本町大字唐古小字ソ子田121-1

調査原因 義団確認調査

調査期間 2001.5.18~11.10

調査面積 424m²

担当者 豊谷和之・藤田慎一

遺物量 174箱

位置・環境 唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万m²に達する。

今回の調査地は、遺跡の北西部にあたり、周辺部では過去に第13・19・38・79・80次の5件の調査が行われている。これらの調査から、本調査地は遺跡西地区の微高地にあたることが予想された。

検出構造 弥生時代中期前半：大型柱穴

弥生時代後期～

古墳時代前期：土坑6基以上、溝3条以上、

柱穴多数

古墳時代後期：方墳3基

中世：大溝1条、素掘小溝多数

近世：素掘小溝多数

出土遺物 弥生土器、石器多数出土。遺物包含層から「鳴石」と考えられる褐鉄鉱片が2点出土している。調査区中央の方墳(ST-101)の周濠からは、須恵器大甕や壺、坏身、坏蓋、陶質土器の壺、土師器壺、木製品棒材が出土した。また、その西側の古墳周濠からは、盾や鎧、馬形埴輪の破片が出土している。

まとめ 調査の結果、上層では弥生時代中期後半～古墳時代前期の遺構とともに、古墳時代後期の方墳3基、中世の大溝を検出している。中世の大溝はL字に屈曲して、調査区外の北側へと延びており、その北側に屋敷があったものと予想される。

なお、調査区東側の排水溝において、下層に大型柱根の存在を確認している。



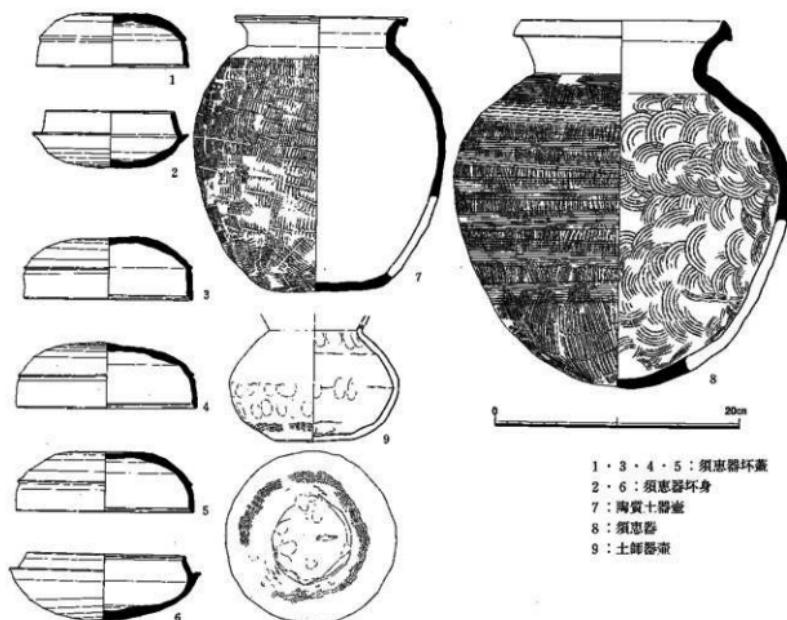
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. ST-101遺物出土状況 (南東から)



1・3・4・5：須恵器壺蓋
 2・6：須恵器壺身
 7：陶質土器壺
 8：須恵器
 9：土器器壺

陶質土器が出土した方墳

近年、発掘調査の蓄積により、唐古・鍵遺跡に古墳時代後期の古墳群が形成されていることが判明してきた。今回の第84次調査においても、墳丘が削平された3基の方墳を検出した。

このうち、調査区中央で検出した方墳(ST-101)は、ほぼ全容が判明している。周溝も含めた全長は長軸14m(東西)、短軸12.8m(南北)、墳長は長軸10m(東西)、短軸8.8m(南北)を測る。周溝の規模は、幅1.8~2.4m、深さ0.2~0.3mである。保存のため、周溝は南側のみを掘り下げた。

その南側周溝からは、土師器の壺1点と須恵器の大壺1点・壺1点・壺身2点・壺蓋4点、陶質土器の壺1点および棒材が出土した。須恵器壺には、田辺編年のTK-47(1・2)とMT-15(3~6)に位置づけられる2時期のものが認められる。このうち特筆されるのは、土師器の壺(9)と陶質土器の壺(7)である。土師器の壺は、下半に籠目状の圧痕がある。陶質土器の壺は平底で、胴部には特異なタキが施される。朝鮮半島西南部からの搬入品と考えられる。

Column

1

唐古・鍵遺跡
第84次

(2) 唐古・鍵遺跡 第85次調査

所在地 田原本町大字唐古小字城ノ前64-1

調査原因 店舗の建築

調査期間 2001.7.11~9.19

調査面積 226m²

担当者 豊谷和之・藤田慎一

遺物量 43箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡の北西部にあたり、周辺部では過去に第31・42次の2件の調査が行われている。これらの調査から本調査地は、居住区線辺部の環濠帯にあたることが予想されていた。

検出遺構 弥生時代中期前半：溝1条、土坑1基、土器棺？1基
弥生時代中期後半：環濠2条
弥生時代後期～
古墳時代前期：環濠2条（再掘削）
中世～近世：井戸2基、土坑2基

出土遺物 弥生時代中期後半の環濠2条からは、ほとんど遺物が出土していない。再掘削された環濠からは、弥生時代後期の土器とともに、庄内式期の土器が出土した。

近世の方形土坑からは、土師器・瓦質土器・陶磁器が出土している。これを切った瓦質井戸には、積み上げ順序を示す墨書き番号（最下段から一～四）があった。瓦質井戸内からは、イシガメとその卵、ネズミ、イタチなどの小動物遺存体が出土した。

まとめ 調査の結果、当初の予想通り弥生時代中期後半の環濠2条を検出した。弥生時代後期初頭と庄内式期に再掘削されている。弥生時代中期後半の環濠に伴う植物屑から、昆虫遺存体を検出した。なお、この両環濠の間にあって平行する弥生時代中期前半の大溝を、下層遺構面で検出している。

近世の遺構は、方形土坑とそれを切る瓦質井戸である。方形土坑は浅く、その性格は不明である。この方形土坑が埋没した窪地に、炭灰および焼土塊が廃棄されていた。



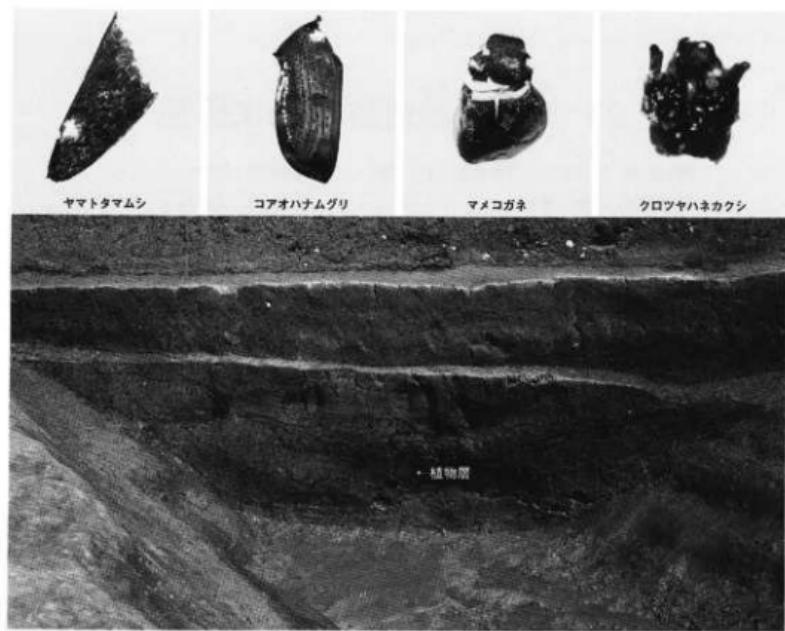
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. 近世遺構完掘状況 (東から)



環濠出土の昆虫からみた古環境

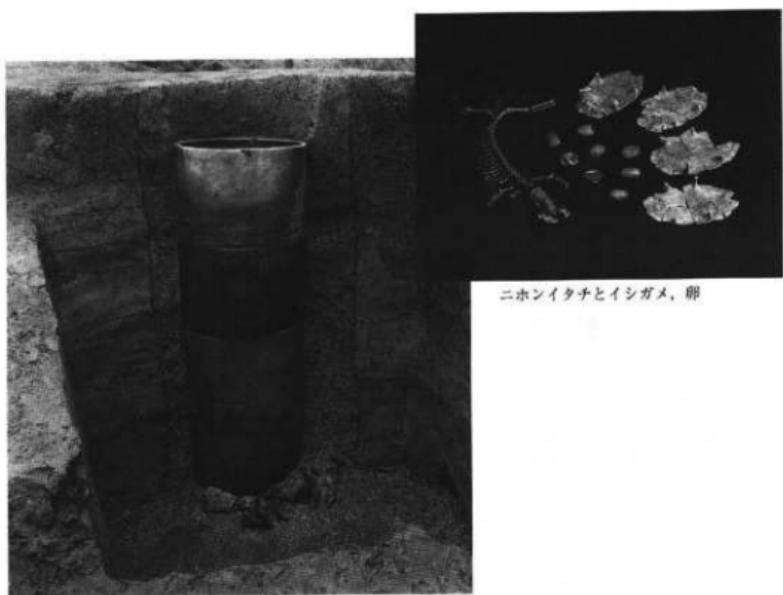
唐古・鍵遺跡第85次調査では、弥生時代中期に掘削され古墳時代初頭まで継続する2条の環濠を検出した。SD-101Bは、調査区東側のもので溝幅約4.3m、深さ1.2mを測る。SD-102Bは、調査区西側のもので溝幅約4.2m、深さ1.5mを測る。両者は、北東-南西方向に軸をもち、約8mの間隔をおいて並行する。弥生時代中期の唐古・鍵遺跡において、最も内側の大環濠から2本程外側の環濠になると考えられる。このため、遺物の出土量は少ない。古墳時代初頭の再掘削溝から、若干まとまって土器が出土したのに止まる。弥生時代中期の堆積と考えられる中層の植物層には、ほとんど遺物が含まれていなかった。しかし、この植物層中からは、サンブルのブロック割りによって、たくさんの昆虫遺体を検出することができた。

橿原市立昆虫館の木村史明学芸員の同定によれば、朽木や樹液に集まる昆虫を多く確認できるという。このことから、唐古・鍵遺跡の北西部環濠帯は、弥生時代中期には雜木林となっていたことが想定される。

Column

2

唐古・鍵遺跡
第85次



ニホンイタチとイシガメ、卵

近世の瓦質井戸枠と亀

今回の第85次調査では、弥生時代以外に、中世から近世の遺構を検出している。このうち、近世初頭の方形土坑（SK-52）を切った井戸（SK-51）は、瓦質の井戸枠をもつ。井戸の平面は円形で、直径0.9m、深さ1.8mを測る。底面は砂層に達する。底面には炭を置き、その上に石が敷き詰められている。瓦質の井戸枠は、石敷きの上に5段まで検出したが、最上段のものは下部を残すのみで、上部は割れて井戸内に落ち込んでいた。井戸枠1段の大きさは、径0.55m、高さ0.4mである。井戸枠には、外面に積み上げ順序を示した漢数字と、内面に目地合わせの縦線が墨書きされていた。

この井戸からは、ニホンイタチ、アカネズミ、イシガメ、カエルなど多くの動物遺体が出土している。またイシガメのものと考えられる卵も出土している。

※動物骨の同定は、大阪市立大学の安部みき子氏による。

Column

3

(3) 唐古・鍵遺跡 第86次調査

所在地 田原本町大字鍵171-1他南側道路
調査原因 下水道人坑の設置
調査期間 2002.12.22~2.8

調査面積 62m²
担当者 豊谷和之
遺物量 50箱

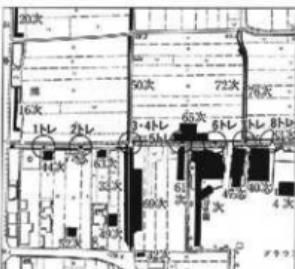
位置・環境 今回の調査地は、遺跡の南側にあたる。環濠内部の居住域であるが、地形的には谷部分であり、これまでの周辺調査では弥生時代中期前半の大溝群が確認されていた。

工事は、国道24号線下にある下水道本管から北小学校までの東西道路下の延長約230mに、下水管を推進工法で敷設するものであった。発掘調査は、開削が伴う人坑部分8ヶ所で行った。

検出遺構 各地点で弥生中期前半に遡る大溝を検出した。埋没時期は大和第Ⅲ様式の前半と考えられる。大溝埋没後の中期後半には、居住区となっていたようで、柱穴多数とともに土坑、小溝などが検出された。

出土遺物
弥生時代中期前半：
第1トレンチ SD-1201内傾LII縁土器
第2トレンチ SD-2201石棒
第5トレンチ SD-5201伊勢湾岸の臺
第6トレンチ SK-6201組み合わせ動
弥生時代後期～古墳時代前期：
第6トレンチ SK-6104後期壺
第7トレンチ SD-7101後期壺・鉢
SK-7101庄内式土器

まとめ 今回検出した大溝群は、谷部の排水機能をもっていたようであるが、大和第Ⅲ-1段階には埋没している。これは、大環濠の掘削時期に一致する。また、東側の調査区で検出された大溝群は、大和第Ⅲ-2～3段階の砂層に覆われている。大環濠を巡らせ水の流れを変えたことによる氾濫の可能性もある。この砂層をベースに弥生時代中期後半の遺構が掘削される。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 伊勢湾岸地域の壺出土状況



3. 石棒出土状況



縄文的祭祀遺物と伊勢湾岸地域の壺

唐古・鍵遺跡第86次調査は、下水道の人坑掘削に伴うものであり、おおよそ $2\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを8箇所で設定した。調査面積としては、小規模なものである。しかし、弥生時代中期前半の大溝群や中期中頃の砂層堆積を検出するなど、得られた成果は大きい。出土遺物については、石棒と伊勢湾岸地域の壺が、特筆できる。

石棒は、結晶片岩製で敲打によって成形し、磨いて仕上げている。頭部を有し、そこには横線が刻まれている。また、破損後には敲打具として使用されていたらしく、頭頂部は潰れる。第2トレンチの大溝から大和第II様式の土器とともに出土した。

伊勢湾岸地域の壺は、長頸の広口で胴部が下膨れとなる。貝殻を施文具とした直線文が特徴である。無文壺を挟んで頸部と胴部に、貝殻直線文が帯状に巡る。直線文帯の上下はヘラ書き直線文で画されている。恐らく、愛知県西部からの搬入品であろう。第5トレンチの大溝から大和第II様式の土器とともに出土した。

Column

4

(4) 阪手東遺跡 第2次調査

所在地 田原本町大字阪手小字アサコダ233-1他
調査原因 (仮称) 総合生涯学習センター建設
調査期間 2001.10.18~2002.2.19

調査面積 4,157m²
担当者 清水琢磨・豆谷和之
遺物量 25箱

位置・環境 阪手東遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。遺跡地図では鎌倉時代の散布地とされているが、その実態は不明であった。第1次調査は、本地の西側で実施されているが、顕著な遺構は検出されておらず、不明な点が多くあった。

調査では、7本の試掘トレンチで遺構の有無を確認し、弥生時代の遺構が検出された南半で本調査を実施した。

検出遺構 弥生時代中期：方形周溝墓16基、土坑4基、溝1条

弥生時代後期：溝3条、土坑1基

古墳時代前期：土坑1基

古代：土坑1基

中世・近世：土坑2基、素掘小溝多数

出土遺物 弥生時代の方形周溝墓の周溝から大和第III-1・2様式の供獻土器が出土した。また、弥生時代後期～古墳時代前期の上坑や溝からは、大和第VI-3様式から布留式の土器が出土した。土器以外の遺物は少ない。

まとめ 調査の結果、本調査地には弥生時代中期中頃の方形周溝墓群が拡がることが判明した。その範囲は明らかでないが、本調査地から南東側・北西側に拡がるものとみられる。本遺跡の北方1kmには唐古・鍵遺跡があり、この遺跡の墓域である可能性が高い。

方形周溝墓群は弥生時代末～古墳時代初頭の明褐色粘質土層に覆われていた。調査区の一部で埴輪状の遺構と足跡が検出されていること、利水施設を伴うとみられる溝が検出されていることなどから、この粘質土層は当該期の水田耕土層であった可能性がある。今後の周辺の調査で検証する必要があろう。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (南東から)



3. 7号墓 遺物出土状況 (東から)



低地部で見つかった大規模な方形周溝墓群

今回の調査では、弥生時代中期中頃の方形周溝墓16基が検出された。周囲の遺跡分布からすると、造墓主体は北側約1kmの唐古・鍵遺跡になる可能性がある。

検出された方形周溝墓は、大和第Ⅲ-1～Ⅲ-2様式を中心とする。最大規模の14号墓は、墳丘部の長軸14m、短軸11.8mを測る。周溝墓群のうち、調査区の北東側で検出されたものは西北西～東南東方向に軸をもつが、調査区南西側のものはほぼ南北方向に軸をもつ。

また、一部の周溝墓では墳丘部を拡張するため、周溝の再掘削が行われた形跡があり、特に7号墓と14号墓では北周溝を外側に掘り直して拡張している。

7基の周溝墓で供獻されたとみられる土器が出土した。7号墓と11号墓では、墳丘肩付近に壺や鉢を据えた状態で検出している。

周溝墓群の北側には、西北西～東南東方向の溝S D-152がある。幅2.5m、深さ0.3mで、溝底には6m前後の間隔でピットが掘削されていた。詳細な時期は明らかでないが、墓域を区画する溝である可能性があり、今後の検討を必要とする。

Column

5

(5) 阪手北遺跡 第3次調査

所在地 三原本町大字阪手小字林昭198-1他

調査原因 都市計画街路道路改良工事

調査期間 2001.12.10~12.22

2002.3.4~3.7

調査面積 147m²

担当者 藤田三郎・豆谷和之・藤田慎一

遺物量 12箱

位置・環境 阪手北遺跡は、寺川東岸にある現阪手北集落とほぼ重なりあう。この地は、古代において下ツ道推定地と保津から阪手を繋いだ斜行道の交差点であった。これまでの2回の調査は、いずれも阪手北集落の南側で行ったものであるが、顕著な遺構は検出されなかった。

今回の道路敷設予定地周辺には、時期不詳の塚が2基あった。調査は、塚隣接地の2ヶ所でおこなった。

検出遺構 第1トレンチ

古代：落ち込み1基、溝1条

中世：溝1条、土坑5基、井戸2基、柱穴5基、素掘小溝多数

第2トレンチ

古代：落ち込み1基

中世：溝2条

出土遺物 第1トレンチ古代の落ち込みから、平安時代の土師器、灰釉陶器とともに石鈴帶の通方が出土した。墨書き土器は2点確認している。中世の溝から、瓦器塊が5点出土した。塚に近く、その区画溝の可能性がある。

第2トレンチ古代の落ち込みから、奈良時代の土師器、須恵器とともに墨書き土器が1点出土した。

まとめ 今回の調査で、当初想定した塚に関連する遺構は明確にすることできなかった。一方で、予想していなかった古代の遺物を多數検出した。落ち込みからの出土ではあったが、近辺に同時期の遺構があることを予想させる。



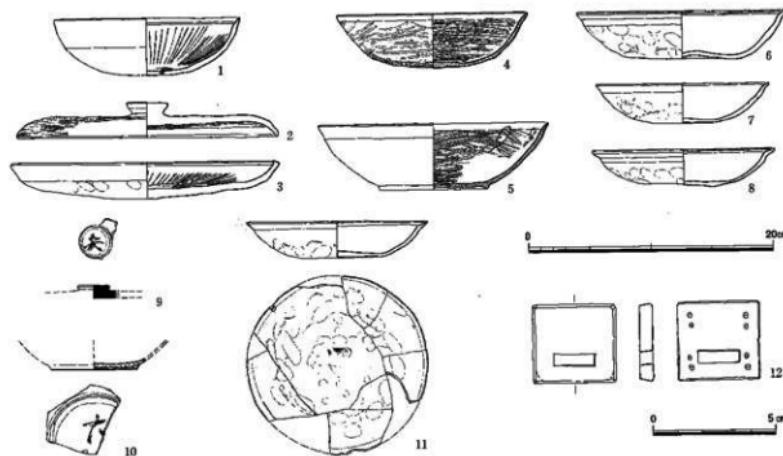
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 第1トレンチ全景 (東から)



3. 第2トレンチ全景 (北から)



阪手北遺跡から出土した古代の遺物

阪手北遺跡は、下ツ道と「保津・阪手道」の東西斜行道路の交差点に位置する。2つの調査区で検出した落ち込みは、それぞれ年代の異なる古代の遺物が出土したが、官衙的な性格の遺物であり、注目される。

第2トレンチ 落ち込み出土遺物（1～3・9）

1は壺。外面はナデ調整、口縁部をヨコナデ。内面に放射一段暗文をもち、その中央に螺旋暗文を施す。2は皿蓋。外面を丁寧に磨く。内面には、螺旋暗文を施す。3は皿。口縁端部は内側に肥厚し、上端に面をもつ。外面はナデ調整、口縁部をヨコナデ。内面には、放射暗文をもち、その中央に螺旋暗文を施す。これらは、平城宮土器II（7世紀前半）の特徴をもつ。この他、9は須恵器壺蓋のつまみ部。頂部は偏平で「矢」を墨書きする。

第1トレンチ 落ち込み下層出土遺物（4～8・10～12）

4・5は、黒色土器塊。4は高台をもたず、外面を削り後に磨いている。5は高台をもち、外面はなで調整のみである。両者には時間差が考えられる。6・7・8は土器器壺である。いずれも調整はナデのみ。7・8は器壁が薄く、ヨコナデによる口縁部の外反は強い。これに対し、6はやや厚手で、口縁端部の肥厚も大きく、古手の様相をもつ。これらの下層土器群は若干の時間幅をもつようであるが、大きくは南都II期－新段階（10世紀前半）に位置づけられるであろう。10は黒色土器A類の底面に、「大」を墨書きしている。11は土器器壺の底面に墨書きしているが、未判読。12は石鈎帯の巡方。裏面の角4方には潜り穴をもつ。白色系の石材を用いる。

Column

6

阪手北遺跡
第3次

(6) 羽子田遺跡 第21次調査

所在 地 田原本町大字新町小字戊亥125

調査面積 268m²

調査原因 分譲住宅の建築

担当者 清水琢哉

調査期間 2001.6.27~7.24

遺物量 3箱

位置・環境 羽子田遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。本遺跡では、弥生時代中期～古墳時代前期の集落関係の遺構、古墳時代前期末～後期の削平古墳を多数検出している。

今回の調査地は遺跡北西部に位置し、これまでに本地の東端において第14次調査を実施し、古墳の周濠と考えられる溝を確認している。また、この周濠からは蓋形埴輪が出土している。従って、本地の西側の調査においても同様の遺構が検出されると予想された。

検出遺構 弥生時代後期：溝1条、土坑1基、河跡1条

古墳時代後期：土坑？1基

中世：落ち込み1基、土坑2基

古墳時代後期の遺構は、調査区西端で一端が検出されたのみであるため、平面形態が明らかでない。土坑の可能性もあるが、溝となる可能性も否定できない。

中世の落ち込みは、調査区の2/3を占める広大なものである。暗灰色粘質土で埋没し、下面には足跡状の窪みが多数存在する。耕作に伴う何らかの遺構とみられる。

出土遺物 弥生時代の遺構からは甕などの小片が出土した。古墳時代後期の遺構からは、木製軸の柄部、須恵器等が出土した。

中世の落ち込みからは、瓦器等の小片が出土した。

まとめ 調査の結果、古墳時代の土坑が古墳の周濠の一部となる可能性があった。しかし、調査区全体は中世の落ち込みにより相当の削平を受けたと考えられ、本地周辺に展開しているであろう古墳群の明確な遺構は検出できなかった。削平古墳については、周辺での調査で明らかにしていく必要がある。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SR-201完掘状況 (南西から)

(7) 羽子田遺跡 第23次調査

所在 地 田原本町大字新町小字庚申橋199-6

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2001.10.23~10.26

調査面積 36m²

担当者 豆谷和之

遺物量 1箱

位置・環境 本調査地は、羽子田遺跡の西端にあたり、保津・宮古遺跡と境に接する。周辺では過去に、保津・宮古遺跡第13・21・26次調査、羽子田遺跡第14・21次調査を行い、方形周溝墓や削平古墳の周濠を検出している。本調査地周辺は、居住域というよりは、その縁辺部にあたることが予想された。

検出遺構 弥生時代中期：溝1条
中世：河跡1条

出土遺物 弥生時代の溝には、中期前半の広口長頸壺が横倒しになっていた。上部が粉々に砕けていたが、埋没時には完品であったと考えられる。中世の河跡からは、埴輪片や瓦器塊片が出上した。

まとめ 今回は、個人住宅の建築に伴う発掘調査のため、面積も限られていたが、中世の河跡と弥生時代の溝を検出した。古墳時代は、埴輪や須恵器など出土遺物があるが、遺構は確認できなかった。

このうち弥生時代の溝は、中期前半の広口長頸壺が1個体出土しており、方形周溝墓の周溝である可能性が考えられる。これまで羽子田遺跡では本調査区の周辺で方形周溝墓が見つかっているが、弥生時代後期後半である。羽子田遺跡は、弥生時代には墓域として弥生時代中期前半から後期まで継続的に方形周溝墓が築かれていたのだろうか。そして、方形周溝墓を築いた集団の居住域はどこにあるのか、問題は多岐に亘る。



1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (南西から)



3. 弥生土器出土状況 (西から)

(8) 羽子田遺跡 第24次調査

所在地 田原本町大字保津小字伊多敷10-12

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2002.1.16~1.25

調査面積 57m²

担当者 藤田三郎・豆谷和之・藤田慎一

遺物量 1箱

位置・環境 本調査地は、羽子田遺跡の西端にあたり、保津・宮古遺跡と境に接する。周辺では過去に、保津・宮古遺跡第21次調査、羽子田遺跡第10・16・23次調査を行い、方形周溝墓や削平古墳の周濠、「保津・阪手道」の道路側溝を検出している。本調査地周辺は、居住域というよりは、その縁辺部にあたることが予想された。

検出構造 弥生時代後期：河跡1条

古墳時代後期：溝1条・土坑1基

中世・近世：素掘小溝

出土遺物 弥生時代後期の河跡およびその周辺から弥生土器や古式土師器が出土しているが、小片で少ない。古墳時代の溝や土坑からは、須恵器壺や土師器が出土した。遺物は、全体に少ない。

まとめ 今回は、個人住宅の建築に伴う小規模な調査であったが、道路側溝の可能性のある溝を確認した。この溝は、東南東から西北西方向に走向するもので、やや位置を南側にずらして再掘削されている。再掘削した溝の規模は幅1.4m（推定2.2m）、深さ0.4~0.5mを測る。これまで確認してきた「保津・阪手道」の道路側溝は、現在の道路の北側で検出してきたが、今回初め現道路より南側で確認したことになる。個溝は再掘削されているため、2時期が想定されるが遺物が少なく、北側で検出した側溝との関係もあり、道路の規模や時期決定にはさらに周辺の調査が必要である。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 河跡完掘状況 (北西から)

(9) ほづみやこ 保津・宮古遺跡 第28次調査

所在地 田原本町大字宮古小字坊ノ北浦136-2他
調査原因 個人住宅の建築
調査期間 2001.4.5~4.17

調査面積 113m²
担当者 清水琢哉
遺物量 1箱

位置・環境 保津・宮古遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。本遺跡は、縄文時代後期～近世までの複合遺跡である。遺跡北西部での第10次・22次・25次調査では飛鳥～奈良時代の遺構・遺物を検出している。特に第10次・22次調査では、柱の規模が大きい建物遺構が見つかっており、付近に官衙的な施設が存在した可能性が考えられている。

今回の調査地は、第10次調査地の北東隣接地、第25次調査地の東側50mに位置する。

検出遺構 中世：土坑1基、素掘小溝多数

近世：土坑1基

中世の土坑は、長辺2.5m、短辺1.9mの長方形で、深さ1mを測る。近世と考えられる土坑は、長軸約4m、深さ約2.5mの方形で、井戸であろう。

出土遺物 中世包含層や素掘小溝より古墳時代～古代の須恵器、土師器、中世の瓦器等が出土しているが、遺物量は極めて少ない。また、中世・近世の土坑各1基からは、ほとんど遺物が出土しなかった。

まとめ 調査の結果、本調査地には奈良時代前後の遺構がほとんど分布していないことが明らかになった。そして、中世以降、耕地としての土地利用が続けられていたことが判明した。

検出された2基の土坑のうち、中世の方形土坑は当初粘土採掘坑である可能性も考えていたが、地山が粗砂層であるため他の性格を考える必要がある。近世の方形土坑は、野井戸としての機能が推測されるが、これも詳細不明である。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (西から)



3. SK-02完掘状況 (北から)

(10) 保津・宮古遺跡 第29次調査

所在 地 田原本町大字宮古小字トン川151-1地

調査原因 通学路整備工事

調査期間 2002.1.10~2.22

調査面積 231m²

担当者 藤田三郎・豆谷和之・藤田慎一

遺物量 12箱

位置・環境 今回の調査地は、遺跡範囲の西端がわずかにかかるが、その大半は範囲外であった。しかし、工事立会を行ったところ、遺物包含層が広がっていたため、発掘調査を行った。調査区は東西に細長いため、2区に分けて調査を行った。

検出遺構 第1トレンチ

弥生時代後期：土坑1基、溝1条、河跡1条
中世・近世：素掘小溝多數

第2トレンチ

弥生時代終末・古墳時代初頭：土器理納土坑1基、土坑2基、柱穴1基
古墳時代中期：溝2条
古墳時代後期：柱穴2基
中世・近世：素掘小溝多數

出土遺物 第1トレンチの弥生時代の土坑から完形の長頸壺が2点出土した。井戸と考えられる。第2トレンチの古墳時代中期の溝からは、須恵器や土師器が出土した。特に溝の西肩では、土師器の壺や甕、須恵器の器台や壺がまとまって出土した。

まとめ 第1トレンチにおける弥生時代遺構の検出は、保津・宮古遺跡の西端の様相を示していた。第2トレンチとの間には、河跡（谷地形）があるため、これをもって保津・宮古遺跡の西端と解釈した。第2トレンチで検出した遺構は、遺構の時期と微高地の方向から宮古北遺跡に含めた。



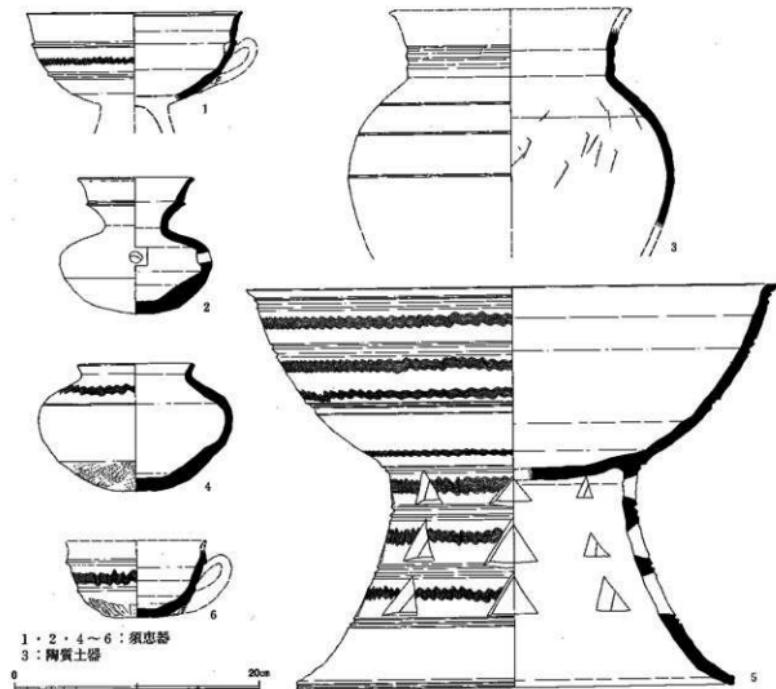
1. 調査地点の位置 (1:5,000)



2. 調査地全景 (東から)



3. 古墳時代中期溝遺物出土状況 (南西から)



5世紀中頃の陶質土器

今回の発掘調査において、第2トレンチの西半で古墳時代中期の大溝SD-2103を検出した。SD-2103は、幅約10m、深さ0.4mを測り、その西肩から須恵器や土師器がまとまって出土した。須恵器は、TK-216の特徴をもつ。周辺には「平塚」の字名をもつ島畠があり、大溝が古墳の周濠となる可能性も考えられる。しかし、埴輪がほとんど出土しなかったことや西肩の土師器が壺や瓶などの日用雑器であることからすれば、にわかに判断は控えるべきかも知れない。

1は把手付高杯。2条の凸帯間に波状文を施す。2は甌。無文。3は陶質土器の壺で、朝鮮西南部産の可能性がある。頸部には2条の凹線、胴部には3条の沈線が巡る。4は短頸甌。胴部上半には波状文と1条の沈線が巡る。5は器台。脚部には、三角形の透かしを入れる。凸帯と波状文による文様構成である。6は把手付鉢。2条の凸帯間に波状文を施す。胴部下半は、縦方向のケズリ。

Column

7

保津・宮古遺跡
第29次

(11) 法貴寺遺跡 第3次調査

所在地 田原本町大字法貴寺小字蓮池田1609

調査面積 211m²

調査原因 マンションの建築

担当者 豆谷和之

調査期間 2001.8.20

遺物量 10箱

2002.1.7~1.18

位置・環境 法貴寺遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。昭和58年の河川付け替え工事に伴う発掘調査（第1次）によって、方形の中世居館跡が明らかとなった。中世居館は、一辺約40mで周囲には濠を多重に巡らせていた。

今回の調査地は、中世居館を検出した第1次調査地の東隣接地である。今回の調査によって、第1次調査では調査区外のため未検出であった東側濠が明らかになるものと考えられた。

検出遺構 中世：大溝4条、溝2条

中世末・近世：溝2条、素掘小溝多数

今回の調査で検出した平行する南北の大溝2条は、第1次調査では未検出であった中世居館跡の東側濠と考えられる。東内側の濠は、東肩のみの検出であるが、濠の軸に直交する2本の丸太材を検出しており、橋が架かっていたものと考えられる。東外側の濠は、北側濠の手前で収束し、幅の狭い渡り堤状を呈する。

出土遺物 東外側の濠には、植物層が厚く堆積していた。植物層からは、木片とともに終末期の瓦器塊、羽釜、白磁四磁蓋片が出土した。13世紀末～14世紀初頭には、東外側の濠が埋没し始めていたと考えられる。

まとめ 今回の調査によって、法貴寺遺跡中世居館の東西幅が45mと判明した。南北幅が40mであったから、濠も含めると50m四方の環濠居館に復元できる。また、橋状の横架材を東内側の濠で検出し、出入口と想定できる。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 橋脚検出状況 (南東から)



大溝から出土した中世の土器

中世居館の出入口

法貴寺遺跡第3次調査では、平行する南北方向の大溝2条を検出した。この大溝2条は、西隣接地で奈良県立橿原考古学研究所が検出した中世豪族居館の東側を区画していたと考えられる。西側の大溝は居館内側を囲んだ内濠になると考えられるが、東肩部分のみの検出である。この東肩には、径0.2mほどの丸太材が2本、2.4m間隔をもって溝の主軸と直交するように横たわっていた。橋脚材の可能性がある。この溝から5m東側に、平行してもう一条大溝がある。東側の大溝の規模は、幅1.8m、深さ0.8mである。外濠になると考えられる。北側は収束しており、ここに居館東側の出入口があったと想定される。この溝は、中層に厚く植物が堆積している。植物層中からは、土師器の羽釜や皿とともに、白磁の壺片が出土している。

今回の大溝2条の検出により、居館の大きさがこれまで知られていった南北約40mに加え、東西が約45mであることが判明した。周囲に複数の溝が巡るその堅牢さは、中世における法貴寺党の隆盛をうかがわせる。

Column

8

法貴寺遺跡
第3次

(12) 法貴寺斎宮前遺跡 第4次調査

所在地 田原本町大字法貴寺小字大庄寺1609

調査面積 164m²

調査原因 水路の改修

担当者 豊谷和之

調査期間 2001.12.3~12.14

遺物量 10箱

位置・環境 法貴寺斎宮前遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。これまでに、3次にわたる発掘調査が行われてきた。

今回の調査地は、法貴寺斎宮前遺跡の北半部にある。調査は、平成12年度に第3次調査として行った水路改修工事の継続事業であり、その延長である南側水路部分を対象とした。第3次調査では、飛鳥時代の河川跡1条と、現水路が18世紀にまで遡ることを確認している。

検出遺構 古代：河跡1条
中世：落ち込み1条

近世～現代：水路1条

出土遺物 古代の河跡からは、須恵器や土師器、黒色土器が出土したが、瓦器は含んでいない。完形の土師器环が1点ある。中世の落ち込みは、古代の河跡に平行してその東岸で検出した。西肩のみの検出であるが、その立ち上がり際には、人頭大の河原石が等間隔に配置されていた。瓦器塊が出土した。

まとめ 今回の調査地は、第3次調査と同じ水路のその南側延長部分である。第3次調査では、水路の下層で中世の堆積層を確認しており、先行水路の可能性も想定されていた。今回の調査でも中世の土器を含んだ落ち込みを確認したが、水路と判断するには至らなかった。

今回の調査では、水路の堆積土より下で、古代の土器を含んだ河跡の東肩も検出している。西肩は検出していないため、その幅は不明である。第3次調査で検出した飛鳥時代河跡との関連も定かではない。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. 中世落ち込み完掘状況 (北から)

(13) 常宝寺遺跡 第1次調査

所在 地 田原本町大字八田小字寺ノ北494-1

調査原因 集会所の建築

調査期間 2001.5.28~6.4

調査面積 108m²

担当者 清水琢哉

遺物量 1箱

位置・環境 常宝寺遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。常宝寺は律宗で、唐招提寺の末寺とされる。本尊は室町時代前期の木像地蔵菩薩立像である。創建年代は不明だが、1322年に僧定範が再興し、彼の死後唐招提寺へ寄進されたという。

常宝寺遺跡では、これまで調査は行われていないが、本堂南隣接地において集会所建築に伴い、発掘調査を実施した。

検出遺構 中世：河跡1条

河川跡は、中世を中心とするものとみられる。調査区北側で鎌倉時代頃の河跡の北肩を検出している。北肩付近での深さは1.3mだが、南側に向かってさらに深くなるものと考えられる。調査区内で幅14mまで確認しているが、さらに南側に拡がるものとみられる。

出土遺物 河跡の下層からは、12世紀頃の瓦器と土師器皿が出土している。また、上層では中世後期頃とみられる土師器羽釜等が出土している。

まとめ 調査の結果、本調査地は中世の河川流域内であったことが明らかとなった。現西八田集落の北側を流れる初瀬川は、堤防の痕跡等からみて調査地の東側100m付近で分岐していたと考えられる。そして、現西八田集落がある微高地を囲むように流れていたのである。

この河跡の埋没が中世後期頃とみられるため、14世紀前半頃に再興されたという寺伝をもつ常宝寺の位置は現状よりも北側に存在した可能性がある。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)



3. SR-51北肩完掘状況 (北から)

(14) 薬王寺推定地 第1次調査

所在地 田原本町大字薬王寺小字西垣内478

調査原因 個人住宅の建築

調査期間 2001.7.31~8.14

調査面積 60m²

担当者 清水琢哉

遺物量 15箱

位置・環境 薬王寺推定地は、標高50m前後の沖積地に立地する。薬王寺は明治4年に廃寺となった黄檗宗の寺院である。推定地には「薬師堂」「薬師池」などの小字名があり、鎌倉から室町時代の焼けた瓦が出土している。

薬王寺推定地としての調査は初めてあるが、十六面・薬王寺遺跡として本地の南側や西側で調査をおこなっている。これらの調査では、寺院の存在を窺わせるような資料はなく、推定地からは外れていると考えられる。

今回の調査地は、現薬王寺集落内にある。地元の方の話では北側隣接地で古い瓦が多数出土していることから、薬王寺関連の遺構が検出されることが予想された。

検出遺構 中世：溝3条、土坑1基

近世：土坑5基

中世の溝SD-51・SD-54はいずれも東西方向で、断面V字形を呈する。幅約2m、深さ0.4m。SD-54埋没後に北側に隣接してSD-51が掘削された。

近世の土坑SK-01は直径0.4mの桶を埋置したもので、便所と推定される。

出土遺物 SD-51からは15世紀頃の土師皿・瓦質土器、瓦（被熱したものを含む）、方鏡印塔片等が出土した。SD-54からは14世紀～15世紀とみられる土師皿・瓦等が出土した。

まとめ 調査の結果、中世の遺構、近世の遺構を検出することができた。特に中世の遺構からは瓦や凝灰岩製の方鏡印塔片が出土していることから、調査地が寺院境内地であったことはほぼ確実であろう。ただし、具体的な伽藍関係の遺構が明らかとなっていないため、今後の調査で明らかにしていく必要がある。



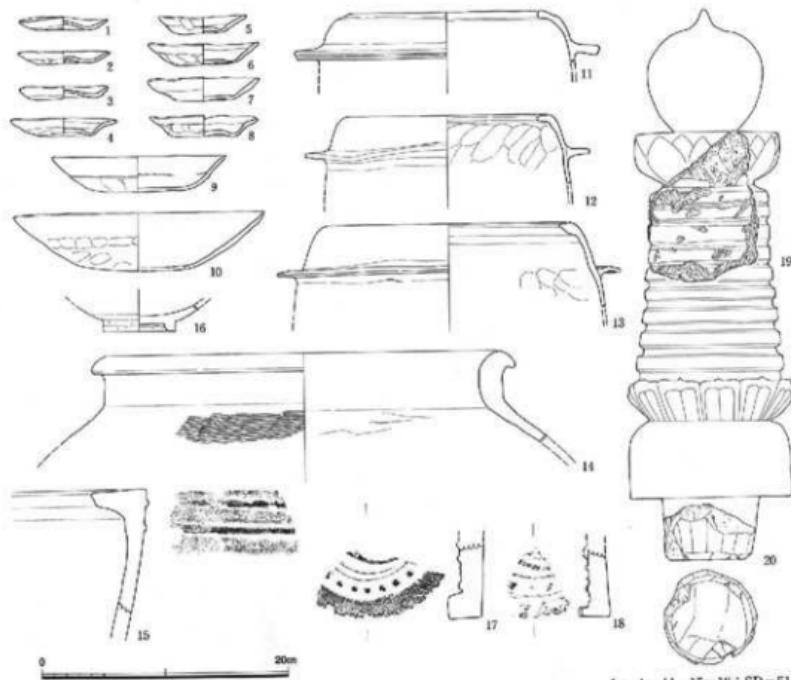
1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. SD-51完掘状況 (西から)



3. SD-54完掘状況 (西から)



1～4, 11, 15～18: SD-51
5～10, 12～14, 20: SD-54
19: 包含層

薬王寺を推定する

今回の調査では、寺院に関わるとみられる遺物が出土した。19・20は凝灰岩製の宝篋印塔相輪部分である。19は包含層から、20はSD-54第2層から出土した。また、17・18は軒丸瓦で、いずれも巴文と連珠文の間を区画する圓線1条をもつとみられる。17はSD-51第5層から、18はSD-51第1層から出土した。このほか、SD-51・54からは布目の残る平瓦が多数出土した。

SD-51・52出土土器のうち、時期を示す遺物を若干図示する。1～8は土師器小皿、9は土師器中皿、10は土師器大皿である。11～13は土師器の羽釜、14は瓦質の甕、15は瓦質の方形鉢、16は白磁碗である。土師器皿のうち1～4がSD-51第4層出土、5～10がSD-54第3～4層出土である。これらの遺物は室町時代に属することから、本調査地には室町期に寺院が存在していたと考えることができる。

Column

9

薬王寺推定地
第1次

(15) 多遺跡 第20次調査

所在地 田原本町大字多小字宮ノ前189-2,190-2

調査原因 携帯電話無線基地の建設

調査期間 2001.9.18~9.25

調査面積 50m²

担当者 清水琢哉

遺物量 2箱

位置・環境 多遺跡は、標高53m前後の沖積地に立地する。これまで19次にわたる発掘調査が行われているが、調査が遺跡西部に集中しているため、集落全体の状況を把握できるまでには至っていない。

今回の調査地は、遺跡南端にある。付近では、北西100mで行われた第7次調査、東側50mで行われた第8次調査などがあるが、いずれも集落辺縁部のため遺構密度、遺物量ともに低いことが確認されている。

検出遺構 古墳時代：溝3条、土坑2基、落込み1基
中世：素掘小溝多数

出土遺物 SK-101は、直径0.9m、深さ0.8mの土坑である。平面円形で、井戸の可能性がある。5世紀後半頃の土器が出上した。SK-102は、直径約0.7m、深さ0.1mの浅い土坑である。土師器高环片が出土した。

南東-北西方向の溝SD-102は、幅約2m、深さ約0.5mをはかる。須恵器小片が上面から出土しているものの、下層出土遺物は弥生土器である。時期不明。

調査区南西端で検出されたSD-103は、推定幅約0.8m、深さ0.2mの浅い溝である。西北西から調査地南西端で南へ屈曲するとみられる。時期不明。

まとめ 調査の結果、本調査地には5世紀頃の遺構が分布していることが明らかとなった。しかし、遺構から出土する土器の量は少なく、集落としては辺縁部に該当する。

SD-102・SD-103は、弥生時代の遺構となる可能性を持つが断定するには至らなかつた。遺物も中期頃の小片が少量出土したのみであり、集落外の様相を呈する。



1. 調査地点の位置 (1 : 5,000)



2. 調査地全景 (北から)

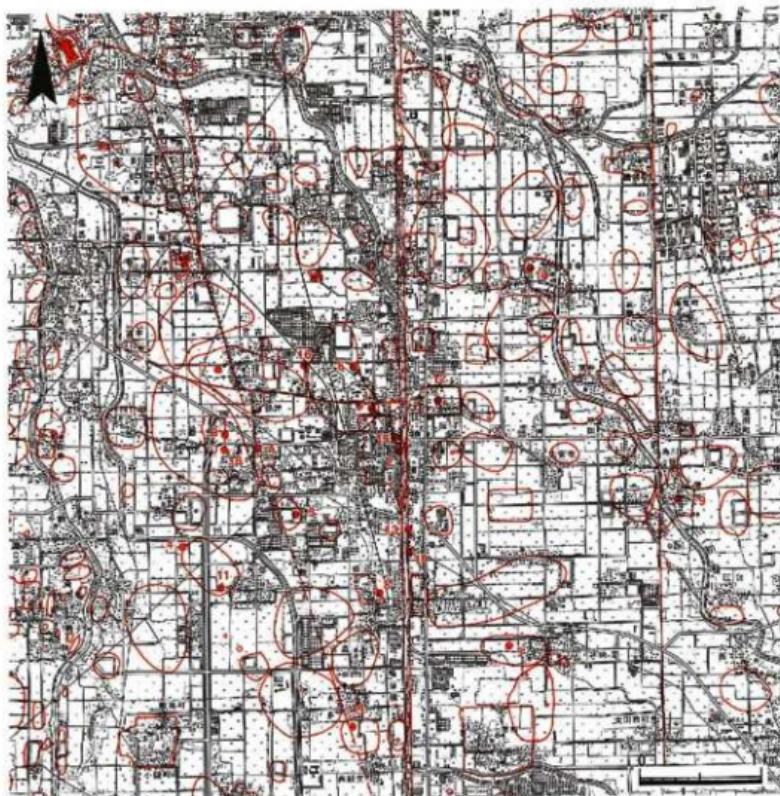


3. SK-101遺物出土状況 (西から)

III. 試掘調査・工事立会の概要

2001年度に実施した試掘調査と工事立会は、第3表及び第4表に示した。試掘調査は2件、工事立会は19件である。試掘調査の2件は、開発工事がやや大きなものであったが、試掘結果を受けて、いずれも設計変更によって現状保存となった。筋道の試掘調査では、これの西側の道路側溝と考えられる溝を確認しており、現保津集落から業王寺集落にかけては、筋道が存在した可能性が高くなかった。

工事立会では、法貴寺遺跡と藏堂遺跡における公共下水道工事の立会で成果がみられた。いずれも現在の集落と重複しており、遺跡の時期や堆積土層のデータを得られることは少なく、今後の対応の資料となった。また、工事立会により、新たに周知の遺跡「味間西遺跡」が加わった。



田原本町の遺跡と試掘調査・工事立会地点

表3 2001年度 試掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	遺跡番号 (田故文発)	調査日	調査日	内 容
A	筋違道	田原本町薬王寺 11,12-1,13-1	(株)しまむら	店舗の建設	27	01.10.16	02.3.18 ～3.19	保存を前提として、造構面の深さを確認するための調査。筋違道西側縫隙とみられる北北西～南南東方向内の溝を確認。地表からの深さ0.5m。
B	十六面・薬王寺遺跡 保津氏居館推定地	田原本町保津 255	大曾根町	運送業者の荷物積降用ステーションの建設	46	02.3.7	02.3.27 ～3.29	造構密度と造構面の深さを確認するための調査。客土1.2m、旧耕土・床土層0.4mで、その直下に中世末の遺物包含層が検出される。その直下は中世水田とみられる灰粘層が開拓全体会に広がる。居舎の外側の様相で、造構密度は低い。設計の変更により立会対応。

(1) 筋違道の試掘調査

所在地 田原本町大字薬王寺小字落田11他

調査期間 2002.3.18～3.19

調査原因 店舗の建築

担当者 清水琢哉

位置と環境 筋違道は、斑鳩と飛鳥を直線で結ぶ北北西～南南東方向の古代道路である。現在も三宅町から田原本町にかけて道路の痕跡が残る。

調査は、店舗の建設に先立ち造構面の深さを把握することを目的として行った。

確認造構 調査は、トレチを7箇所設置して行った。このうち、西側に設置したトレチで古代とみられる溝SD-101を検出した。幅3m以上、深さ約1mで、埋土は粗砂を中心である。また、中央に設置したトレチでは、筋違道と方向の一致する幅0.65mの小溝SD-51を検出した。

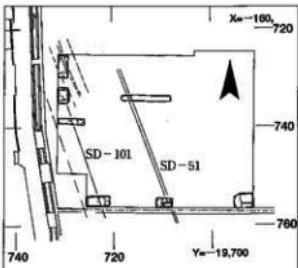
出土遺物 SD-101からは古代とみられる土器が少量出土している。

まとめ 今回の調査で検出したSD-101は、南側で行われた薬王寺東遺跡第1次調査の成果などから、筋違道の西側側溝となる可能性が高い。一方、東側側溝については、検出していない。SD-51は中世の可能性があるが、性格は不明である。

調査の結果、造構面の深さは水田耕土下0.5mであることを確認した。これに基づき、造構面までの保護層30cmを確保するように設計変更が行われた。



1. 試掘調査の位置 (1 : 5,000)



2. 検出した造構 (1 : 1,000)

表4 2001年度 工事立会一覧表

番号	道跡名	調査地	原因者	工事の目的	道跡番号 (田畠文苑)	進度日	調査日	内 容
1	羽子田遺跡	田原本町字カジヤ 365-5	林本繁雄	個人住宅の建築	24	01. 2. 15	01. 4. 12	建設予定地中央付近で埋葬。 -0.5mで造成前の水田面を確認。 基礎は客土内に収まる。
2	田原本寺内町 遺跡	田原本町字三輪町 459	渡邊治記	個人住宅の建築	27	01. 3. 13	01. 4. 19	業者から既に着工している旨 の連絡あり、基礎工事まで終 わっており調査不能。
3	味間西遺跡 (新規発見)	田原本町大字味間 字笠原内230	車谷純司	農家住宅、青空駐車場 H12. 9. 8付 農業委員会議案			01. 4. 25	周知の遺跡外であるが、工事 時に土器が出土した。工事掘 削により遺物が露出しており、 土坑数基、土塊、角などの遺 構が全体に並ぶ。出土遺物 は備倉時代が中心。
4	矢部遺跡	田原本町大字溝田 281-4	悠井俊紀	個人住宅の建築	2	01. 4. 27	01. 5. 9 01. 5. 17	掘削掘削時立会。自然底路と 遺物を若干干渉する旨確認。 敷地東南では土坑などはピット状況。
5	薬王寺南遺跡	田原本町大字三笠 196	細山商量	分譲住宅の建築	26	01. 3. 7	01. 6. 1	掘削出露東側の排水路工事時 に立会。客土±0.5mで掘削0.5mのため、旧田尻上面にとど まる。
6	羽子田遺跡	田原本町大字八尾 664-6	福岡 貴	個人住宅の建築	7	01. 6. 11	01. 6. 29	1mの遺成堆上面での改良杭 打ち込み作業のため、調査不 可能。
7	保津・宮古 遺跡	田原本町大字宮古 138-1	土江秀典	掘削工事			01. 9. 6	未届の掘削が行われたため立 会。掘削部は水没し、遺構の 有無不明。將士に七唇多く含 まれる。周囲の遺跡内である 所有者に通知。
8	楽楽寺遺跡	田原本町大字楽楽 寺261-1東側水路	田原本町長	水路改修	23	01. 10. 3	01. 11. 7 ~11. 8	工事延長200mのうち4地点 で順序確認。中世末~近世初 頭の大溝内。
9	藏堂遺跡	田原本町	田原本町長	下水道工事	29	01. 11. 13	01. 11. 14 ~11. 29	藏堂集落内での下水管渠設 工事。無落西平で中世の包含層 と遺構を確認。
10	法貴寺遺跡	田原本町	田原本町長	下水道工事	35	01. 11. 16	01. 11. 21 ~12. 5	法貴寺樂路西側での下水管渠 設工事。中世包含層及び焼土 層確認。
11	矢部遺跡	田原本町	田原本町長	道路整備	24	01. 10. 3	01. 11. 26 ~11. 28	矢部集落西側での道路整備工 事。地山の明褐色粘土の上間に 灰紗層確認。中世土耕層土 層か?
12	阪手北岸遺跡	田原本町大字阪手	田原本町長	水路改修	37	01. 12. 11	02. 1. 11	近世の礫瀝埋土内。陶磁器出 土。
13	下ツ道	田原本町大字千代 366-5	今村 盛	個人住宅の建築	25	01. 10. 3	02. 1. 18	沙化排水削除時立会。深さ2m だが、川堤防護のため客 土内に収まる。
14	多新堂遺跡	田原本町大字多 162-1	吉尾 真	農業用仓库の建 築	42	02. 1. 17	02. 1. 21	敷地4隅に試掘坑を設営。深 さ0.3mで河床の上面堆積が取 出される。また、敷地南西隅 で土を被出し、崩落と関連?
15	平野氏跡遺跡	田原本町785-1	松原英実	共同住宅の建築	41	01. 12. 26	02. 1. 23	敷地内2ヶ所で立会。いずれ も河灘内の状況を示す。
16	羽子田遺跡	田原本町新町	田原本町	水路改修	34	01. 11. 27	02. 1. 25	海壁部分での掘削。包含層、 遺物とともに確認されず。
17	黒田大塚古墳	田原本町黒田348	田原本ライオ ンズクラブ	史跡案内柱の建 立	現状変更等 申請	01. 10. 2	02. 2. 13	第2次調査地点での設置。掘 削は既に客土内にとどまる。
18	十六面・藻工 寺遺跡	田原本町大字保津 239	森本長秀	個人住宅の建築	40	01. 12. 26	02. 2. 28 ~3. 1	海壁前面部分で立会。古墳時 代の遺物は含め検出。
19	下ツ道	田原本町大字千代 349-24	岸本満雄	個人住宅の建築	38	01. 12. 17	02. 3. 14	改良統一法があるが、客土が 3m以上とみられるため調査不 可能と判断。深さ1.6mまで調 査できたが客土内。

(1) 法貴寺遺跡の立会

所在地 田原本町大字法貴寺1056-2他東側道路
立会日 2001.11.21~12.5

立会原因 下水道管の埋設
担当者 豆谷和之

立会の内容 現法貴寺集落に西側で、公共下水道管理設の工事が行われた。法貴寺集落の大部分は、法貴寺遺跡の範囲に含まれている。法貴寺遺跡では、これまでに3次の発掘調査が行われてきた。いずれも、昭和58年に付け替えられた旧初瀬川から東側での調査である。今回、工事が行われた旧初瀬川から西側の集落は、調査が及んでおらず、埋蔵文化財の状況は不明であった。

下水道管の掘削は、幅が0.9mと狭く、深さが1.5mに及ぶもので、集落内の道幅は狭く、十分な調査が行えるような状況ではなかった。このため、土層断面の観察と記録を目的とした工事立会を行った。

確認遺構・遺物 集落内部では、近代とそれ以前の2面の遺構検出面を確認した。堆積土は砂質土で、工事掘削深度の1.5mまで、瓦器塊片などの遺物を包含していた。

集落西側の道路は、客土下に青灰色粘質土層が続き、河道あるいは大溝の上層堆積物と考えられる。

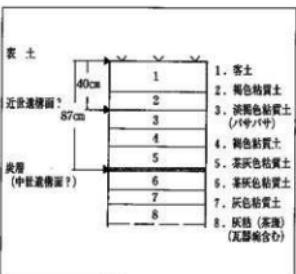
まとめ 今回初めて、法貴寺集落西側での調査となつた。上記の成果から、遺跡西側については、現集落の範囲とほぼ一致することが想定できる。集落内の遺物包含層は厚く、1mを超えており、中世以降に形成されたものであろう。遺物包含層は砂質土であり、自然堤防の堆積様相を示していた。屋敷地として利用されるのは、近世以降であろう。



1. 遺跡内の小字名 (1 : 5,000)



2. 立地地点の位置 (1 : 5,000)



3. 基本土層図 (1 : 40)

(2) 蔵堂遺跡の立会

所 在 地 田原本町大字藏堂281北側道路他
立 会 日 2001.11.14~11.29

立会原因 下水道管の埋設
担 当 者 豆谷和之

立会の内容 蔵堂集落で、公共下水道管埋設の工事が行われた。藏堂集落から初瀬川を挟んで村屋神社までは、藏堂遺跡の範囲となっている。「多聞院日記」には、戦国末期永禄・元亀年間に「森屋之城」「森屋藏堂城」の記述が見られる。森屋一党が、藏堂辺りに館を構えていたことが想定された。

下水道管の掘削は、幅が0.9mと狭く、深さが2mに及ぶもので、集落内の道幅は狭く、十分な調査が行えるような状況ではなかつた。しかし、下水道管は、藏堂集落を縱横に走ることから、これまで調査が行われていない蔵堂遺跡の埋存状況を明らかにすると考えられた。このため、土層断面の観察と記録を目的とした工事立会を行つた。

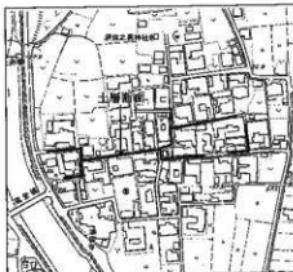
確認遺構・遺物 須佐之男神社の前面を南北に走る道路で分かたれた集落東半と西半では、堆積が異なる。集落東半は、青灰色砂や青灰色粘土が厚く堆積し、堆積状況は安定していない。しかし、青灰色砂を掘り込み面として、弥生時代の遺構を1基検出した。

集落西半は、東半に比較して安定した堆積を示しており、青灰色粘土上にその上面が中世遺構検出面となる淡褐色粘質土が堆積していた。この面から掘り込まれた、井戸や溝と考えられる土層の落ち込みを確認した。

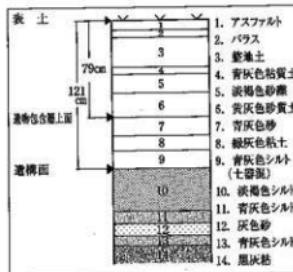
ま と め 現蔵堂集落の西半で、中世の遺構面を確認した。東半は安定した上層堆積を確認できなかった。これをもって、東半が集落外であるとは断言できず、下水管部分が大溝にあたっていた可能性も残されている。



1. 遺跡内の小字名 (1 : 5,000)



2. 立会地点の位置 (1 : 5,000)



3. 基本土層図 (1 : 40)

(3) 味間西遺跡の立会

所在地 田原本町大字味間字堂垣内230

立会日 2001.4.25

調査原因 個人住宅の建築

担当者 豆谷和之・清水琢磨

位置・環境 味間西遺跡は、標高55m前後の沖積地、現味間集落の西側に位置する。これまで遺跡の存在は知られていなかったが、地元の方から工事現場で土器が出土している旨の連絡があり、町文化財保存課職員が確認を行った。

検出遺構 土を入れ替えるためか水田耕土・床土が除去されていたため、中世の各遺構が露出していた。敷地西端で南北方向の溝SD-52を、敷地南端で東西方向の溝SD-51を確認した。中世の土坑も数基点在する。

出土遺物 SK-51からは12世紀頃の土師皿細片が出土した。SK-52・53は瓦器小片を含むものの詳細不明。SD-51からは12世紀代の瓦器小片等が出土した。粗砂で埋没するSD-52からは遺物を採集できなかった。このほか、地元の方が採集した土器に12世紀頃の瓦器(1)が、立会時に堆土から採取した土器に龍泉窯とみられる青磁碗(2)がある。

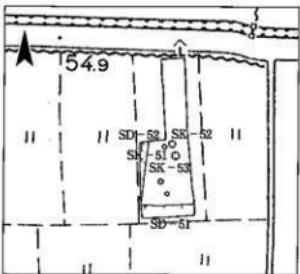
まとめ 今回確認された味間西遺跡は、大溝により区画された中世の屋敷地であると考えられる。ただし、「堂垣内」という寺院の存在を示唆するような小字名から、寺院関連の遺跡である可能性も考えられる。

田原本町教育委員会は、今後の開発に対しては周知の遺跡として取り扱えるよう、平成14年4月12日付「教文第32号「理蔵文化財包蔵地の異動について」を奈良県教育委員会に進呈して遺跡の新規確認を報告した。

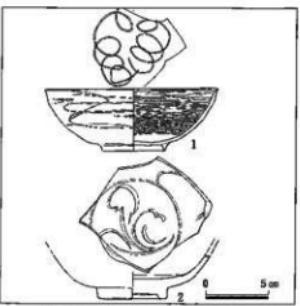
これをうけて、奈良県教育委員会からは平成14年4月22日付「教文第320-8号「奈良県遺跡地図の記載変更について(通知)」により遺跡地図の変更を通知した。



1. 立会地点の位置 (1 : 5,000)



2. 検出した遺構略図 (1 : 1500)



3. 出土遺物 (1 : 4)

(4) 平野氏陣屋跡の立会

所在地 田原本町小字奥垣内785-1

立会原因 共同住宅の建築

立会日 2002.1.23

担当者 藤田三郎

立会の内容 平野氏陣屋跡の南東部、寺川の堤防から約

20m西の地点において、共同住宅の建築に伴う工事立会をおこなった。建物の中央と東端において遺構の有無と土層の観察を実施した。

いずれの試掘坑においても表土下約50~70cmで淡褐色の粗砂層に達し、本地が河跡内であることが判明した。遺物はほとんどない。

まとめ 今回の立会により、陣屋が形成された江戸時代の状況は、居住遺構が認められるような安定した状況を示していない。絵地図においても空閑地として存在しているようで、合致する。時期決定はできないが、寺川の自然堤防あるいは河川内であった可能性が高い。現在の堤防においても本地付近がわずかに西側へ蛇行しており、その名残と考えられる。



1. 立会地点の位置 (1 : 5,000)

(5) 矢部遺跡の立会

所在地 田原本町大字矢部53-1他南側道路

立会日 2001.11.26~11.28

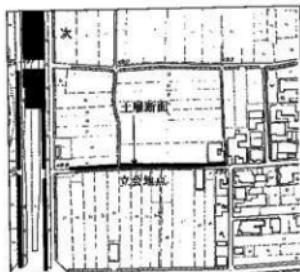
立会原因 道路の改良 担当者 豊谷和之

立会の内容 現矢部集落の西側で、東西に走る農道の改良工事が行われ、深さ0.8mの掘削が伴った。

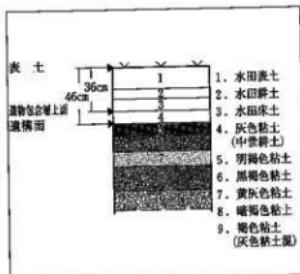
確認遺構 現水田面から約0.5m前後で、明褐色粘質土が検出される。この上面には、灰色粘土層が厚さ0.1mほど堆積し、磨耗した土器片や瓦器塊片が出土している。なお、明褐色粘質土は、東側で落ち込み、砂層が堆積していた。

まとめ 今回確認した灰色粘土層は、大字矢部から大字多にかけて拡がる中世水田耕土層と考えられる。

また、明褐色粘質土の上面は、遺構面出面になると考えられたが、今回の調査では遺構を確認することはできなかった。



1. 立会地点の位置 (1 : 5,000)



2. 基本土層図 (1 : 40)

田原本町埋蔵文化財調査年報11
2001年度

平成14年3月30日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 明新印刷株式会社

